

# 現代における人形の怪異伝承の研究

鳴海 あかり

はじめに

本論では、主に愛玩用・鑑賞用人形について、現代人がなぜ人形を怖いと考えるかをテーマとする。人形というものは家族や友人、自分の分身のようにかわいがられる反面、怖いという人もいる。現代の怪談にも髪が伸びるお菊人形、3本足のリカちゃん、ひとりかくれんぼなど多くの人形に関する話が存在する。この多面的な特徴を論ずることで、民俗文化における人形の位置を考えていくことができると考えたものである。

人形というものは古代から畏怖の対象とされるものである。縄文時代の土偶から始まり、早くは『源氏物語』にも登場するヒトガタ流し、子供の守り人形として用いられた天児・這子など、数々の呪具としての人形があった。反面、ひいな遊びといった遊びの人形もあり、ヒトガタ流しなどの行事と融合して雛祭り行事の原型になったとも言われている。またそういった流れ

の一部は、実は現代的な供養である人形供養にも繋がるなど、現代人の人形観に大きな影響を与えている。そういったものも含めつつ、今回は現代人の人形観について怪異という側面から見ていきたい。

## 1. 先行研究

本論のテーマに関連する先行研究として、まず人形の歴史については山田（一九六一）が天児・這子、雛人形などを挙げ、日本における人形そのものの歴史を述べる。<sup>①</sup> また斎藤（一九七五）はひな人形の文化史について、かたしる流しやひいな遊びを挙げてまとめている。<sup>②</sup>

怪異伝承という面からは、香川（二〇一一）はドールとフィギュアを区別し、妖怪がフィギュアとして成立する過程について、古代から人形観の変遷を辿り、フィギュアは人形が「異質な他者」でなくなることで成立したものであると指摘する。<sup>③</sup>

田中（二〇〇五）は人形供養とそれが人々の人形観に及ぼす影響について、かつてメディアに取り上げられ有名になった「髪の伸びる日本人形」である「お菊人形」にも触れて論じている。<sup>④</sup>

香川（二〇一八）は最も今回のテーマに近い内容を論じている。まず自身の著書『江戸の妖怪革命』を下地とし、その「妖怪革命」から取り残されていた例外が人形であり、他のものとは異なる次元にあったとした。そして江戸時代の人形の怪談を挙げて当時の人形観を論じた後、「髪の毛の伸びる人形」に触れ、現代の人形の怪談はほとんどの場合人間の霊が人形に入って怪異を起こしている。また「憑きもの」の一種としての人形の怪異や、人形供養にも触れる。

以上が主な先行研究である。しかし、現代における人形の怪異の研究は珍しく、触れていても部分的である。また一口に現代における人形の怪異といってもこれらで触れられているよりかはるかに多くの種類の怪異が存在するのではないかと考えた。そこで本稿では、現代の人形の怪異伝承に焦点を当て、話を様々に収集し、性質ごとに分類して論ずることにした。

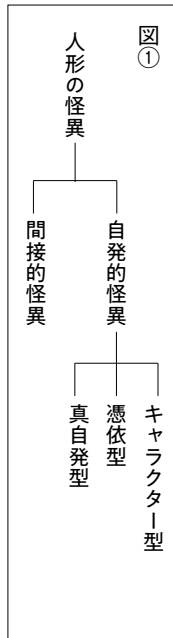
## 2. 自発的怪異・間接的怪異

現代の日本人の人形観を論じるにあたり、様々な情報源を参照し、書籍・新聞・雑誌などから人形の怪奇現象についての話を二・三九話収集した。内容を全体にわたって検討し、これらは

以下の二つのタイプに分類しようのではないかと考えた。一つが、人形自体が怪異と化して怪奇現象を引き起こす場合。例としては、髪が伸びる人形、夜中勝手に動き回る人形などが挙げられる。もう一つが、人形を媒介にする場合。あくまでも人形は脇役で、人形自体が怪異ではなく、実際には人間が主体となっているものである。例として、丑の刻参りなどの呪詛人形、虫送り・病送りの人形などが挙げられる。この二種の怪異は根本的に異なるのではないかと考えたため、前者を「自発的怪異」、後者を「間接的怪異」と呼称し、分類して考察することにした。

また、自発的怪異は全体的に見て非常に数が多かった上、その中でも性質が異なるものがあると考えたため、さらに三つに分けることにした。「誰かである人形」が怪奇現象を起こす「キャラクター型」、何かの魂が人形に入り込む「憑依型」、どちらでもなく「誰でもない人形」がそのまま怪異となる「真自発型」の三つである。「真自発型」とは不自然な呼称かもしれないが、自発的怪異の中でも本当にひとりで怪異となる＝真に自発的な怪異として名付けた。「誰かである人形」と「誰でもない人形」とは、怪異とされるようになるプロセスが異なるのではないかと考えたからである。具体的に説明すると、キャラクター型はもともと何かのレプリカとしての人形が、基本的にはモデルとなったものの物語を再現するもの。憑依型は空っぽの人形に何か別の魂が入り込んで怪異をなすもの。そして真自発型は何でもないただの無機物としての人形が怪異となるもので、いわゆる

る付喪神に似たものがある。このように全く異なる背景を持っているので、分類して検討する必要があると考えたのである。図に表すと、以下のようなになる。



概念の説明だけではわかりにくいいため、それぞれの具体例を示す。まずは自発的怪異のうち、キャラクター型の例である。

薩摩藩士の八右衛門というのが、痴情の果てになじみ女郎の菊野を初め、5人を殺した事件にちなんだ浄瑠璃を見たことがある。……その早田八右衛門の人形が毎晩のように楽屋を暴れ回った。人形遣いの楽屋に片つ端から闖入し、置かれた人形を片つ端から切り倒した。<sup>6)</sup>

人形座の人形など、役柄を与えられている人形劇の人形が動く、というモチーフである。多くの場合、夜に動きだし、役に合わせた行動をとり、敵同士の人形は斬り合う。持ち主によるとよくあることだ、珍しくないと言われることもある。天保十二年(一八四一) 発刊の奇談集『絵本百物語』にも、「夜楽屋」と称し、敵同士の人形が取っ組み合う様子が描かれている(図1参照)。人

女が三人の武家に思われ、その通いぶりから大夫は人形師に自分の生き人形三体を作らせた。製作の中頃から大夫はひどくやつれだし、完成した日には遂に死んでしまった。三体は勿論三人の武士に贈られ、そのうちの一体がこれだとい<sup>7)</sup>。

このように、何者かの魂などが入り込むことで人形が怪異と化すものが憑依型怪異である。のちに詳しく紹介する、代表的な「髪の毛の伸びる人形」である「お菊人形」もお菊ちゃんという少女の念が宿った、という例が多く、憑依型に分類されると言えるだろう。次に自発的怪異のうち、ただの人形が怪異と化す真自発型の例である。以下はその要約である。

生家の柳原家に二つの古い人形があった。一つはみどり丸一つは日吉といった。人形は生きていてという。ある夏、皆が避暑に行き、留守番の者たちは散らばって休もうという話になった。みどり丸と日吉が床の間に座る部屋に泊まった女中が火を消したとたん、大きな火の玉のようなものが転がってきて、驚いて寢床に潜りこんでしまった。火の玉は座敷中をぐるぐる回ってみどり丸の前で消えた。<sup>8)</sup>

他にも子供のいない夫婦が江戸人形を買い人間のよう世話したら、夢に出て泣き叫んだという話や、雛人形が人のように笑ったという話がある。前者のように、人形の扱いとして「人間と同



図1『竹原春泉 絵本百物語 桃山人夜話』(多田克己編、1997年刊、国書刊行会)より

形座の人形が動くというのはある種の当たり前であったということが見て取れる。人格を当てはめられたことで、その人格をもつ人間そのものとされたのだろう。

次に自発的怪異のうち、何かが人形に入り込んで怪異を起こす「憑依型」の例を挙げる。以下はその要約である。

東京三河島蓮田一四〇古道具屋にて古い大きな人形が出た。競りで買い取った金町の大井金五郎(仮名)が家へ持ち帰り、改めて箱を開くと、人形が淋しげな顔で微笑したという。それから金五郎は気が違ったようになってしまった。地蔵院へ納めて永代供養をして貰うことになった。もとの持ち主を調べ、由来を聞くと、これは三十年前に手に入れた熊本の氏族の秘蔵だったという。文化のころ吉原の小式部大夫という遊

じように世話した」という例がいくつかあり、ただの人形でも愛情をもって人間と同じように接すれば意思が宿るという思想が垣間見られる。しかし後者の雛人形の方はそういったことはない。こちらは国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」によると、一七九三年から一七九七年の成立とされている。そのころから何でもない人形がひとりで、付喪神に近い器物の怪異と化す思想はあったのだということがわかる。

最後に間接的怪異の例である。この分類の怪異を起こすのはあくまで人間の呪いの念であり、人形はただ道具として使われているにすぎない。以下はその要約である。

三年ほど前のこと、ある家の改築で持山の松を使うために切り倒した。作業をしやすいと根元の落ち葉や土を剥くと、紺色の毛糸を束ねた人形が、五寸釘を打ち込まれて刺さっていた。一同は何となく気味悪く思った。その中で木挽や左官、製材の職人が次々事故を起こした。神官の家の仕事だったので、人形を取り出し、お祓いして焼いてもらった。釘の錆具合から、五、六年はたっているだろうとのことだ<sup>9)</sup>。

やはり木に五寸釘を打って呪うといった、丑の刻参りのようなものは多くみられる。そういったものについては後にまとめて述べる。

他にも田の境を争ったとき、麦稈人形を作って田の中に埋め

ておくと無理を行った人が減びるといふ例や、ハシカ流し、あるいは厄落としのために藁人形をサンダワラに乗せて流すという例も見られた。前者は丑の刻参りと似たような呪術的行為であると言える。後者は前述の、厄などをヒトガタに移して流すヒトガタ流しとの関連が一つ指摘できるだろう。

ここで一つ、疑問が生まれるだろう。同じく外からの働きかけで怪異となる、間接的怪異と憑依型自発的怪異の違いである。その問いにここで答えておきたい。間接的怪異は、最初から呪術などの目的で作った人形で呪いなどをかけるものである。それに対し、憑依型自発的怪異はもともと怪異とするつもりではなかった、普通の人形に何かが入り怪異となるものである。そのため一見似

表1 時代別内訳 (全体)

	自発	間接	その他
江戸以前	3	2	1
明治	4	22	2
大正	5	2	0
昭和戦前期	11	5	4
昭和戦後期	8	12	3
平成	130	19	6
合計	161	62	16

表2 時代別内訳 (自発的怪異)

	憑依型	キャラクター型	真自発型
江戸以前	0	2	1
明治	2	0	2
大正	0	4	1
昭和戦前期	2	4	5
昭和戦後期	1	6	1
平成	20	39	71
合計	25	55	81

らそうと貴船神社に丑の時参りをしていると、「御身は都より丑の時参り召る、御かたにて渡候か」と鬼になるための神託が神職を通じて告げられる。

さて、丑の刻参り、呪いの藁人形という随分古風な印象が強いかと思う。私は様々なデータベースを参照し、一八二二年から二〇〇二年にかけて合計四十六話の話を収集したが、その中にも「昔は行われていたが、今は行われない」というものが散見された。では、今は全く失われてしまったのか、ということではない。呪いの藁人形は、現代では現代なりの現れ方をしているのである。収集した話から、比較的最近の事例をいくつか紹介しよう。以下は要約である。

見出し…町長落選腹いせワラ人形 島の町二分、しこり今も  
愛媛県中島町で昨年、町長選挙が行われた。現町長と元町長の一騎打ちで、現町長が再選となった。二週間後、現町長の宅に五センチの釘が刺さった藁人形が送られてきた。告訴を受けた警察の調べで、元町長が逮捕された<sup>10)</sup>。

愛媛県中島町の事例。釘が刺さった藁人形が嫌がらせに使われている。釘が刺さった人形⇨呪いの人形というイメージ、ひいてはそれによる恐怖・嫌悪が最近になって根強いことがわかる。

見出し：「ふらふら」田んぼの中に「わら人形」

ていても、根本的に異なるものであると言えるのである。

また、その二・三九話を時代別に集計したところ、以下のようになった(表1、2参照)。注目すべきは、自発的怪異と間接的怪異の割合である。昭和戦後期までは二つの比率は同じくらい、あるいは間接的怪異の方が多いくらいだが、平成に入ってから一気に自発的怪異が増える。つまり、人形自体が怖いという逸話が増えたということである。これにはもちろん様々な要因が考えられるが、一つには後に詳しく紹介するお菊人形の影響が大きいのではないかと考えている。

### 3. 事例ごとの分析

#### (1) 丑の刻参り・呪いの藁人形

本章では収集した人形の怪異のうち、報告が多く影響が大きいとみられる類似事例の一部をまとめて考察していきたい。まずは先ほどの分類でいう間接的怪異の代表として、丑の刻参り、ひいては呪いの藁人形が挙げられるかと思う。

丑の刻参りは丑の時参りとも言い、言わずもがな、人を呪うための方法の一つである。白衣を着、頭には鉄輪にろうそくを立てた格好で、神社の樹木などに相手に模した藁人形を釘で打ち込むことで、七日目の満願の日に相手が死ぬとされていた。特に近世にかけて様々な説話において確認できるモチーフである。例えば謡曲『鉄輪』では、夫に捨てられた女性が恨みを晴らすために、田んぼの水の見回りから帰った夫が開口一番、「驚いたな。あんなのはドラマの中だけかと思っていた」と言う。聞けば、何とわら人形が水路を流れてきたそうだ。……他人が不幸になることを念じるとは。事情があつてのことかも知れないが、一体だれが、何のために、という想像してしまった。翌日、犬の散歩がてら見に行くと、30センチほどの人形がまだあった。……いろいろ話題を提供してくれた人形。結局そのままにし、先日行ってみると、もう見当たらない<sup>11)</sup>。

群馬県高崎市の事例。呪いの藁人形の事例であることに違いないが、特筆すべきは、「釘が打ち込まれた」とは一言も書いていないことである。ただ書いていないだけという可能性もあるが、他の記事では釘のことに必ず言及され、雑誌や新聞記事では見出しに入ることも少なくない。それほどまでに重要な要素を外すとは考えづらい。さて、藁人形とは無論藁で作った人形であり、古くから呪いだけではなく子供のおもちゃ、戦で敵を欺くダミーなど様々な用途で使われてきたものである。しかしここではなんでもないただの藁人形が単体で流れてきただけで迷いなく呪いの人形と断じている。つまりここからは、藁人形というものが一般的ではなくなった現代では、藁人形⇨呪いの人形という印象が強いことがわかる。藁人形それ自体が恐怖の対象となっているのである。

## (2) お菊人形

現代の人形の怪談として早くに語られてきた代表的な事例として、「髪の伸びる日本人形」が挙げられる。その筆頭が、一九七〇年代からテレビや新聞などで次々に取り上げられた「お菊人形」である。非常によく知られている話ではあるが、まずは概要の紹介をしたい。この人形は北海道空知群栗沢町万字の萬念寺に実際に安置されている日本人形であり、髪が伸びるのだと言われているものである。そしてこの人形には具体的な逸話が存在する。以下にその要約を示す。

大正七年（一九一八年）。当時十八歳の鈴木栄吉さんが札幌の大正博覧会見物の帰り、当時三歳の妹・お菊ちゃんにお土産としておかつぱの日本人形を買った。お菊ちゃんは毎日楽しく人形と遊んでいたが、翌年一月二十四日、病気で亡くなる。栄吉さんは遺骨と一緒に人形を仏壇に祭り、毎日拝んでいたところ、不思議なことに髪が伸び始めた。昭和十三年、栄吉さんは遺骨と人形をこの寺に預け樺太へ移住。戦後引き揚げ、寺を訪れた栄吉さんは更に髪が伸びた人形に改めて驚愕。「菊子の霊が乗り移ったのでは」と人形を本堂に移した。<sup>14)</sup>

これが今日までによく知られた「お菊人形」の逸話である。小池壮彦氏によると、「お菊人形」の逸話の初出は一九六二年八月六日号の『女性自身』であり、その内容は著者がテレビ番

組などで見ていた内容とは大きく異なっていることを指摘している。そして他二冊の娯楽雑誌を挙げて内容の変化を述べる。<sup>15)</sup> 内容の違いを表に表すと以下の通りである。

掲載誌	出版年	時代	人形を預けた人	少女の名前	命日	移住先
『女性自身』	一九六二年	昭和三年 (一九五八)	鈴木助七 少女の父	清子 (三才の冬)	記述なし	本州
『ヤングレディ』	一九六八年	大正七年 (一九一八)	鈴木栄吉 少女の父	お菊	三月二十四日	樺太
『北海道新聞』	一九七〇年	大正七年 (一九一八)	鈴木栄吉 少女の兄	お菊・菊子	一月二十四日	樺太

## (3) 髪の伸びる人形

お菊人形の強大な影響力は「髪の伸びる人形」という一つの独立したモチーフを形成することとなった。私が収集した多くの大衆娯楽雑誌の記事からは、一九九〇年から二〇一五年までの記事から二十三話、新聞記事から一話、お菊人形を含む「髪の伸びる人形」を確認できた。これは表4としてまとめた。長いため本論の最後に載せているので、そちらを参照いただきたい。ここでは同じ記事でも別の怪異と一緒に載せていた場合は別にカウントしている。また最後に写真や逸話、安置場所、またはその特徴が同じであることから同一のものかと判断できる怪異については同一の番号を振り、その中で雑誌の出版年順のアルファベットを付け区別している。

この事例群からは、お菊人形の影響を受けてそれ以降様々な「髪の伸びる人形」が発見されてきたことがわかる。特筆すべきは、稲川淳二氏の話を除けば、お菊人形をはじめとして見に行ける「実物」が存在するという共通点である。「実物が存在する」というインパクトは大きく、それによって真実性を高めていると言える。

## (4) 三本足のリカちゃん人形

誰もが知るタカラトミー社の女兒向け着せ替え人形である、リカちゃん人形。その認知度を反映するように、怪談の世界にも度々リカちゃん人形が登場する。「三本足のリカちゃん人形」はその一つである。まずは代表例をご紹介します。以下は要約である。

ある女性が公衆便所に入ると、リカちゃん人形が転がっていた。何気なく手に取ると、なんとそれには足が三本も生えていた。彼女は思わず人形を床に投げ捨てた。すると人形はリカちゃん電話でおなじみのあの機械的な音声で彼女に向かってしゃべり出した。

「わたしリカちゃん、でも、呪われてるの、呪われてるの……」

彼女は恐ろしくなり逃げ出したが、逃げてでも逃げてでも人形の声が消えない。ついには自らの鼓膜を突き破ってしまった。<sup>14)</sup>

足が三本生えたりリカちゃん人形が不気味に現れ、多くは呪いをばらまくなどするというモチーフである。今回、一九九二年から二〇〇四年までの資料二十二話を集めたが、そのうち二十話は学校の怪談に関連した話であった。またそのうち十四話は学校のトイレを舞台としており、その中には「〇階の〇番目のトイレにいて、『三本足のリカちゃん』と呼ぶとでてる」といった、トイレの花子さん風のものが目立った。これは当時の学校の怪談ブームの影響が推定されるだろう。

しかし、学校の怪談でないものは代表例としてご紹介した二〇〇三年と二〇〇四年の二話しか確認できなかった。そのうち、代表例の出典書籍の元となっている都市伝説関連サイト「現代奇談」でも、「三本足のリカちゃん」が載る最古のアーカイブは二〇〇二年であった。<sup>15)</sup> 一般に上記の話が基本形だとされており、『日本現代怪異事典』にも基本形として載っているが、本当に学校の怪談でないバージョンが当初存在した型なのか、そういった疑問に応えるには一九九二年以前の記録を調べていく必要があると考えている。

また、この話は先ほど「2.自発的怪異・間接的怪異」で提示した分類に基づくと、例外は一話あるが、それ以外はキャラクター型に分類される。人形座の人形が動くモチーフと同様、もともと人格が与えられた人形のため、人間に近い存在として見られやすかったのだと言える。しかし人形座の人形が動くモチーフと異なる点が一つある。それは設定に沿った行動をしている

わけではないことである。リカちゃん人形は設定上、ただの「あかるくてちよっぴりあわてんぼうな小学5年生」であり、間違っても呪われているだとか、人を襲うといった設定は公式にはないのである。それにも関わらずそういったイメージが与えられる。その裏には人間や死者に対する恐怖を人形に仮託しているのではない、「人形そのものが怖い」という観念の強化が読み取れるのではないだろうか。

#### 4. 人形供養祭について

##### (1) 人形供養の歴史

人形供養祭、あるいは人形感謝祭といった、人形を納めて供養する祭りに参加したことがあるだろうか。様々な神社仏閣、セレモニールホールなどでも行われており、非常に一般的にもよく知られているといえよう。図2は、今年の明治神宮人形感謝祭



図2 令和2年明治神宮人形感謝祭ポスター(明治神宮 人形感謝祭公式ブログ  
(<http://ningyoukansha.jugem.jp/>)  
2020年1月30日付の記事より 2020年6月29日参照)

巢鴨の帝国小学校校内人形病院にては来る十八日午後一時より人形供養を営む、志賀師読経、西山校長用朗朗読、生徒人形供養歌合唱などある由人形埋葬希望の方は十七日まで同校へ持参すれば喜んで引き受け懇ろに供養す<sup>16)</sup>

(旧字体は新字体に改めた)

人形供養のお知らせ、および供養する人形を募集する記事である。その一週間後、十九日付の記事に実際に行われた人形供養の写真が載っている。同紙で一九二〇、一九二五、一九二六年と帝国小学校の人形供養に関する記事が確認できる。住職の読経など、現代と同じように人間と同じ供養をしている一方、現代とは違い土葬形式であったことがわかる。先行研究では齋藤良輔編『日本人形玩具辞典』でも、巢鴨の帝国小学校でこの前年の一九一八年に行われたものが現在の形での「人形供養」の最初であるとしている。

このように、実は古くから連続と続いてきたものではなく、むしろ近代以降、現代的な観念とともに構成されてきた現代的な供養であることがわかる。そのため、現代人の人形観を考える上で外せない要素であると考えられる。

しかし、勿論人形供養という新しい供養が突然現れたわけではない。人形供養行事の前身には前述の先行研究で指摘される道具供養のほか、雑流し行事の影響が推定される。そしてその雑流し行事から始まり、江戸中期ごろから現代にいたるまで人

祭のポスターである。いかにも古くから続いてきた供養であるかのように思われるが、先行研究でも紹介した田中正流(二〇〇五)の「人形供養にみる人形観の諸相」によると

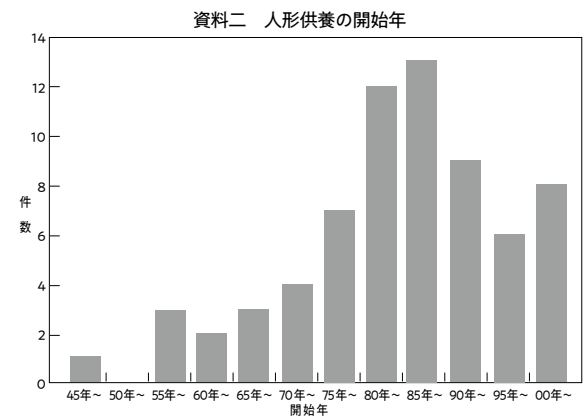


図3 田中正流「人形供養にみる人形観の諸相」[かたち・あそび] 第16号(日本人形玩具学会、2005年)268ページより

「高度成長期の住環境の変化やマスコミの影響などにより、従来の道具供養を参考にして新しく作られた」供養であるとしている。そして全国八十六の人形供養祭を調査し、開始年等をグラフ化している(図3参照)。また七十年代から八十年代にかけて人形供養が激増する理由として、お菊人形の影響を指摘している。

このグラフは戦後から始まっているが、古い新聞記事を調べてみたところ、一番古いもので一九一九年六月十二日付の読売新聞の記事に人形供養に関する記述が確認できた。

形供養の神社として非常に有名な神社がある。それが和歌山県加太市にある淡島神社である。

##### (2) 淡島神社人形供養

まずは淡島神社の概要を軽くご紹介する。所在地は和歌山県歌山市加太、御祭神は少彦名命、大己貴命、息長足姫命。以下はホームページに掲載されている、「淡島神社の起り」である<sup>17)</sup>。

その昔、神功皇后が三韓出兵からお帰りの際、瀬戸の海上で激しい嵐に出会いました。沈みそうになる船の中で神に祈りを捧げると、お告げがありました。

「船の苦(とま)を海に投げ、その流れのままに船を進めよ。」その通りに船を進めると、ひとつの島にたどり着く事が出来ました。

その島が、友ヶ島です。その島には、少彦名命と大己貴命が祭られていて、皇后さまは助けてくれたお礼の気持ちを含めて、持ち帰ってきた宝物をお供えになりました。

その後、何年か経ち、神功皇后の孫にあたられる仁徳天皇が友ヶ島に狩りに来られ、いきさつをお聞きになりました。そこで、島では何かとご不自由であろうと、お社を対岸の加太に移され、ご社殿をお建てになったのが、加太淡嶋神社の起りりとされています。

広く女性のための神様として、婦人病・安産祈願、また縁結び、そして雛人形の神として信仰されてきた神社である。

淡島信仰は江戸中期ごろに流行し、淡島願人という乞食坊主が、淡島明神をかたどった人形を入れた小さな社を携えて淡島明神の功德を説いて歩き、病気の女性から衣服を預かって代参を請け負ったとされる。古くは『塵塚物語』（一五五〇年頃）にもその布教の様子が書かれている。

また『紀伊統風土記』（一八三九年完成<sup>(18)</sup>）には祀られる神々由来、行われる祭りの他、「諸侯方及び諸国の土庶より雛共に雛の其婦人の手道具等を奉納する事夥しくして神殿中に充滿す」というような雛奉納の記述が確認できる。また神功皇后が少彦名命の雛を作り奉納したことが始まりであり、「宇禮豆玖物とて雛を作りて甑ひ或は神殿に納れば婦人女子小児の諸病を攘除き夫婦のかたらひの妙をなす悪神を祓ひ鎮め給ふ諸国の雛祭りも是より始まるとぞ」として雛祭りの起源を主張している。また書かれている由来はホームページに書かれている右記のものとはほぼ同じであり、おそらくはこの文献を参考にしたのだろうということが推測できる。

そして現在では、人形供養の神社として非常に有名な神社である。年末年始、仏滅、祭りの直前・当日以外は一年中人形の奉納を受け付けている。社殿で受け付け、紙のヒトガタに住所、名前、願い事を書いて一緒に提出する。納められた人形はご祈祷の後、「人形は出来るだけ長く見られることで幸せになれる」

このような雛の奉納は間違いなく現代の淡島神社の雛流しにつながっている。しかし、上記の『紀伊統風土記』の記述をみると、人形を供養するというよりも雛を奉納してそれを媒体とし、女性や子供の病を除くという願いを掛けるという意味が強いと思われる。宮司さんも、かつては藁や木など自然に還るものを人形に見立てて流していたとも述べており、呪具としての使用という印象が強い。

対し、現代でも厄払いで預ける人もいるものの、上記のような神社で人形が大量に飾られている様子や、調査の際の参拝者の様子などからみても人形が主役であるという印象を受ける。人形供養の変化という形でここにも人形観の変化が読み取ることができのではないだろうか。

また先ほど「髪が伸びる人形」の項でも取り上げたが、収集した娯楽雑誌記事にいくつか淡島神社が登場していた。これはやはり常時神社に人形がびっしりと飾られている異様さや、ひいては人形の印象が強い神社であることにより、恐怖の対象となったと思われる。人形とそれに対する恐怖とは切り離せないものであることがわかる。

## おわりに

このように、現代日本における人形観の変化は様々な場面で如実に表れており、それらを口承文芸の研究で救いあげること



図4 和歌山県淡島神社 著者撮影 2019年11月24日

との考えの元、境内に展示される。図4は二〇一九十一月二十四日に宮司の前田智子さんにお話を伺うために訪れた際、筆者が撮った写真である。祭りでもなんでもない平時であるにもかかわらず、社殿の両側に人形がびっしりと飾られているのが強烈な印象を与える。

そして年中行事として有名なものが、毎年三月三日に行われる「雛流し神事」である。納められた人形の一部と提出されたヒトガタを三艘の舟に乗せ、女性が担いで社殿の近くの棧橋から流すという行事である。江戸中期、紀州の徳川のお姫様の初節句に健康、厄払いとして一対のお雛様を奉納したのがきっかけだとされている。宮司さん曰く、かつては神社のすぐ前の海に参拝者がそれぞれ流していたが、昭和三十七年から加太の観光行事として推していくことになり、現在の形式になったとのこと。

さて先ほど、江戸中期から人形供養の神社として有名だった、と述べた。確かに、人形供養という言葉こそ出てこないものの、ができると考えている。特に人形に対する「恐怖」は人形観において非常に重要な要素であり、そのため人形の怪異の研究によって現代日本人の霊魂観や怪異観を探ることができると考えている。

今回は人形の怪異を性質ごとに分類して定義し、報告の多い類似事例をいくつか紹介した。しかし、メリーさんの電話やリカちゃん電話、青い目の人形、二宮金次郎像の怪など、見逃しがたい影響を持っているにもかかわらず調査不足で今回言及できなかった説話も数多く存在する。また前述のチャッキキーなど、現代日本人にも影響の大きい海外の事例も含め、それらは今後の課題としたい。

## 注

- (1) 山田徳兵衛『新編日本人形史』一九六一 角川書店
- (2) 斎藤良輔『ひな人形』一九七五 法政大学出版局
- (3) 香川雅信『妖怪／フィギュア論』『比較日本文化研究』第十五号 二〇二二 比較日本文化研究会
- (4) 田中正流『人形供養にみる人形観の諸相』『かたち・あそび』第十六号 二〇〇五 日本人形玩具学会
- (5) 香川雅信『妖怪としての人形』『文化を映す鏡を磨く―異人・妖怪・ワールドワーク』二〇一八 せりか書房
- (6) 水島爾保布『操人形の怪談』『伝説』復刻版 一九八四 有明書房

表4 髪 of 伸びる人形

No.	地域	場所	人形の種類	内容要約	掲載誌	発行年	備考
1	大阪 (北海道土産)		アイヌ人形	十年ぶりにケースを開けたら伸びていた	毎日新聞	1978	
2-a	北海道空知郡栗沢	万年寺	市松人形	基本的な紹介	女性自身	1990	通称： お菊人形
2-b	同	同	同	基本的な紹介	女性セブン	1991	同
2-c	同	同	同	お菊人形の表情が大人び、口が開いてきている	女性セブン	1993	同
2-d	同	同	同	お菊人形は傷みから非公開に	女性セブン	2015	同
3-a	山梨県須玉町	臨濟宗東漸寺	木目込み人形	髪が伸びる。気味が悪いので預けた。	週刊女性	1991	
3-b	同	同	同	預けた後も伸び続けた	ムー	2006	
4-a			市松人形	様々な怪異を起こす	女性自身	1990	語り手： 稲川淳二
4-b			同	ほぼ同	女性セブン	1990	同
4-c			同	ほぼ同	微笑	1991	同
4-d			同	ほぼ同	女性セブン	1994	同
5-a	和歌山県和歌山市加太	淡島神社	多種多様	髪が伸びる、笑う、泣く	女性セブン	1993	
5-b	同	同	同	いわれのある人形だけは地下蔵に保管	FRIDAY	1997	
5-c	同	同	同	髪が伸びる / 表情が変わる	FRIDAY	2002	
5-d	同	同	同	夜は人形が瞬きする、首が回る、口を開ける	実話ナックルズ	2008	
6	埼玉県秩父郡小鹿野町	地藏寺	日本人形	3年のみ髪が伸びた	女性セブン	1991	
7-a	北海道帯広市		鬼子母神像	髪が伸びる	女性自身	1990	
7-b	北海道帯広市 柏林台南町	妙徳堂	鬼子母神像	髪が伸びる	女性セブン	1991	
8	北九州市戸畑	寂光寺	鬼子母神像	髪が伸びる	女性セブン	1991	
9	京都市上京区	瑞雲院	稚児如来像	髪が伸びる	女性セブン	1991	
10	岩手県遠野市	民宿「とおの」	日本人形	ザシキワラシのご神体の髪が伸びる	読売新聞	2008	
11-a	大分県大分市	曹洞宗良福寺	日本舞踊人形	娘の夢見が悪い。髪が伸びて抜け落ちる。	ムー	2011	
11-b	同	同	同	ほぼ同	女性セブン	2015	
12	長野県長野市戸隠 (類似例)		日本人形	20年前から右側の髪が伸び続ける	女性セブン	2015	
13-a	和歌山県田辺市		市松人形	背中から汗びっしょり、白髪が生える	女性自身	1990	
13-b	同		同	白髪が生える	女性セブン	1991	
13-c	同		同	霊能者に見てもらった。女の子が入っている。	女性セブン	1992	
14-a			お雛様	下唇に肌色の舌が生えた	女性自身	1989	
14-b	静岡県	ある家	同	ほぼ同	女性自身	1990	
15	山梨県須玉町	臨濟宗東漸寺	フラダンス人形	髪のパーマがストレートに	週刊女性	1991	

- (7) 湯本豪一編『昭和戦前期怪異妖怪記事資料集成(上)』二〇一六 国書刊行会
- (8) (7)と同
- (9) 和田文夫「民俗短信」『福島の民俗』第十三号 一九八五 福島県民俗学会
- (10) 『読売新聞』一九九九年三月十三日 夕刊 十四頁
- (11) 『読売新聞』二〇〇〇年八月二日 朝刊 二十三頁
- (12) 『北海道新聞』一九七〇年八月十五日 夕刊 五頁
- (13) 小池社彦「手押し車を押す看護婦・幽霊ボート・髪 of 伸びるお菊人形」『現代怪奇解体新書』別冊宝島四一五 一九九八
- (14) 松山ひろし「3本足のリカちゃん人形 真夜中の都市伝説」二〇〇三 イースト・プレス
- (15) 「現代奇談」(二〇〇二年五月二十八日アーカイブ) △<http://web.archive.org/web/20020528064252/http://osi.cool.ne.jp:80/>
- (16) 『読売新聞』一九一九年六月十二日 朝刊 四頁
- (17) 淡島神社ホームページ △<http://www.kada.jp/awashina/index.html> △二〇二〇年六月二十五日参照
- (18) 『紀伊続風土記』第一輯 一九一〇 和歌山県神職取締所 五一―五三頁

〈参考文献〉

国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/youkaido/index.html>) (参照二〇二〇年五月)

- 朝里樹『日本現代怪異事典』二〇一八 笠間書院
- 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』二〇〇九 国書刊行会
- 同編『大正期怪異妖怪記事資料集成 上・下巻』二〇一四 国書刊行会
- 同編『昭和戦前期怪異妖怪記事資料集成 上・中・下巻』二〇一六 国書刊行会
- 読売新聞社「ヨミダス歴史館」(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>) (参照二〇二〇年五月二十一日)
- 毎日新聞社「毎索」([https://dbs.g-search.or.jp/WMA/IDCU/WMA/ideu\\_menu.html](https://dbs.g-search.or.jp/WMA/IDCU/WMA/ideu_menu.html)) (参照二〇二〇年六月四日)
- 朝日新聞社「聞蔵Ⅱ」(<http://database.asahi.com/index.shtml>) (参照二〇二〇年六月十一日)
- 皓星社「おこさくプラス」(<https://zassaku-plus.com/>) (参照二〇二〇年五月二十一日)
- 大宅壮一文庫「大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web版」(<https://www.oya-bunko.com/>) (参照二〇二〇年五月二十一日)
- 斎藤良輔編『日本人形玩具辞典』一九六八 東京堂出版
- 『日本随筆大成 第二期十』一九七四 吉川弘文館
- 『改定史籍集覧』第十冊 一九六八 史籍集覧研究所 七十一頁
- (なるみ・あかり) 國學院大學博士課程前期